

「だましぎつね」

おかし、古橋ふるはしのある山には、何匹ものきつねが住すんでいました。

その山に、枝えだうちに行ったおじいさんは、たいへんな芝居しばい好き
でした。

その日は、仕事しごとが終おわらず山小屋やまごやに泊とまることになりました。

おじいさんは、うつらうつらしていましたが、どうも辺あたりの
様子ようすが変へんなので目めをあけると、目の前まえに見たこともない

芝居しばい小屋ごやがありました。

おじいさんは、キツネのしわざだなど思いながらも、中ちゆうに入いって
見みることにしました。

やがて、チョン、チョン、チョンと拍子木ひょうしぎがなり、幕まくが開あきました。

「あれ、おかしいな。右みぎから開あけるのに、反あ対たいから開あけよったぞ」
と、つぶやくと、今度は右みぎから開あきました。

おじいさんは、幕の開き方あや、芝居がおもしろいので

そのままだまって見ていましたが、いつの間にか夜よも明あけ、

おじいさんは楽しいたの一夜いちやを過すすごすことができました。

おじいさんは

「きつねよ、なかなかおもしろい芝居じゃったわい。こんどまた

山で泊とまったときにも見せてくれよ。」

というと、芝居小屋はあとかたもなく消きえてしまいました。

それからというもの、きつねは自分のしたことが、おじいさんに

ばれてしまっにどてはずかしいのか、二度と芝居を見せなくなっとたというきこととです。

「きのもとのおかし話」木之本町教育委員会より